
Cou Le Nae

手回しオルガン弾き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o u L e N a e

【Nコード】

N 6 7 3 3 Z

【作者名】

手回しオルガン弾き

【あらすじ】

C o u L e N a eとかそんなんです。

Coule Nae

彼女はそこにいた。ほかにどこにいるというんだろう。僕には想像もつかない。

時間はもう過ぎていた。もう始まっているはずだった。立ち尽くす人々の前に、彼女はいるはずだった。白い肌と、くすぐったい長い髪の毛と、赤ん坊の指みたいな肩と、それから生きることに対する上目づかない嘲笑と、からかうような小さな鼻と、あざけりと、ゆるやかな時を持って。雨が降りそうだった。西からやってきた、都会を腐らせる古びたスモッグだった。夜はアルコールの湿気を含み、明かりの助けを借りて狂騒的に波打っていた。ここは静かだ。まだ誰もいない。もう少ししたら、彼女を見終えた人々がここに溢れるだろう。それまではひんやりと静かだ。

クラブの中に入ると、停滞したざわめきを感じた。暗さはいつも通りだった。ごつごつした機械じみた天井から降りてくる暗闇は不潔で生温かったし、集まった人々が互いに必要とする、わずかな肩と肩の隙間は敏感な苛立ちを含んでいた。足下にすでに吸い殻が散らばっている。暗闇は雪だった。ゆっくりと、誰にも気づかれないように――その点で雪と違ったけれど――人々の肩や、襟の隙間や、スニーカーの編み目や、僕の爪の上へと、積もって行った。静かで確かな移り変わり。僕らは気づかないほどゆっくりと色あせて行く被写体みたいだった。雪の中、遠ざかる船を見送りに来た村人みたいだった。けれど、何かが違った。いつもと少しだけ。少し壁紙がはがれかけている壁も、人々の手あかでペンキの欠けたポールも、足跡だらけのスピーカも同じだったけど、何かが。それはここに

る人々の意識だった。柔らかくもろい、感情の部分だった。彼らはそわそわとなにかを伺っていた。なにをだろう。この人ごみの向こうには、彼らをつま先立ちさせ、ふらふらと肩越しに首を振らせる何かがあった。ほとんどすべての人は黙っていたけれど、人が集まると必ずそうなるように、どこかで数人のグループが囁いていた。彼らは自分たちのささやきがほかの黙っている人々の耳に入ることとどこかで期待していた。囁きは大きくなり、くすぐったような笑い声とともに注意があり、それから再び小さくなった。僕は人と人の隙間を無理に抜けて行く。ダウンを着たままの男の脇腹を抜けると、服の擦れる素早い音が聞こえた。それからグラスが合わさる音。人ごみは密接に関係し、それぞれがつながりあっていた。僕が起こした波紋は遠くに波及し、フロアの隅にいる暗闇に舌打ちを引き起こした。彼らは影だった。僕は異邦人だった。彼らは正面の光を背景に、ぼんやりと揺れる、意思を持たない黒い煙だった。なにも始まらないこの景色と反対に、光はいくつもあった。白い光も、赤い光も、ときどきは紫や緑の光も。だからと言って僕は少しも満たされなかった。ただ光は、そのときどきで、僕らの気持ちと無関係に大きく跳ねたり、集まったり、散らばったりした。光はそれだけで一つの情景のようだった。遠い牧草地で行われる、静かな感情の繊細なやり取りのようだった。僕は少しずつ人の間を抜けて行く。足と足の隙間を飛び越えて行く。

彼女はステージにいるみたいだった。姿は見えない。近づくに連れて声が少しずつ大きく聴こえた。まだ幼さの残る詰まったような甘い声だった。

「……それじゃあ、広島から……？」

声は僕にまで届ききらなかった。僕と彼女の間にある暗い床に落ちてしまった。それらを拾い集めるみたいにして、僕はもっと前進しなくちゃならなかった。

「……広島の……から……？」

「……じゃない……に……それで、東京に……」

「……は？……に行つたつきり……たしか……」

「……知ってる、そう、あいつはあれつきり……」

「……そう……あのときは……」

「…………も無理は…………わけじゃ…………」

「……ええ…………かも…………」

彼女の声が聴けて僕は嬉しかった。子供の頃に好きだった缶詰の特別なクッキーを思い出した。今は名前も思い出せない、海外の言葉で書かれたうす茶色い缶詰。彼女はもうすぐそばだった。もうすぐ彼女の甘い鼻にかかった声を、ひとつ残らず聴くことが出来る。僕は速まる鼓動とは反対に、人を越える速度をゆるめ、フロアの先頭に辿り着こうとしていた。人々の垣根の向こうに、彼女がいて何かを喋っている。彼女の声だけが聴こえる。姿は見えないけど、声だけが。

「……知ってる、そう、あいつはあれつきり……」

二人は声を立てて笑った。

「知ってる？」

これは彼女の声。

越えられない最後の一群があつて、僕は彼らを迂回しなくちゃならなかった。僕は人々が作る、波のように歪んでいる背中の壁に沿って、急いでフロアを横切っていく。人々の頭の影が途切れるところで、何度も彼女を振り返った。その度に、彼女の溢れる髪や、白い指や、爪や、微笑みが見えた。僕は爪先立ちになり、ゾンビみたいに左右に揺れる。それから名残り惜しそこにその場を去り、また急いで歩き始める。振り返るたびに、彼女の姿は少しだけ遠のいた。

「――嘘でしょ？」

僕が人ごみをかき分けて最後の一群を越えたとき、彼女はそう言った。それから笑った。彼女は暖かなオレンジ色の膨張した光の中にいた。ステージのポールに腰掛け、見上げる一人の男と話をしていた。いつもと同じ彼女だった。気怠そうで、長くたっぷりとした髪のあいだで、眠気と戯れているみたいで、いつもの彼女だった。

「ホントにそう、子供の頃は——」

彼女の声。なんの障害もなく僕に届く、完璧な彼女の声だ。

「そう、あめ玉で泣き出しちまうような——」

「キャンディ・ローズ！」

彼らは笑った。

「よく覚えてるな」嬉しそうに男が言う。

「なにしてるのかしら」

「二年前に会ったときは、なにか販売を——」

「販売？」彼女は垂れた髪を後ろへやる。「怪しい」

「怪しくない」

「なんの？」

「たしか、そのときは——コピー機って言ってたかな」

「今は？」

「今も販売。ただし怪しい」

彼女は笑う。「何を売ってるの？」

「怪しい水」

二人は笑った。そして静かに微笑み合った。彼女は手を差し出すと男と親しみのこもった握手をした。

立ち上がった彼女は光の中で、輪郭を淡く瞬かせ、光の中に消えていこうとしているみたいだった。彼女は眠たそうに微笑んだまま、しばらく男を眺めていた。ここに集まった僕らは身じろぎも出来なかった。彼女は立ち上がっただけだった。長くたつぷりとした髪を、ただ少し溢れるように揺らせただけだった。髪の毛の一本一本や、胸のあたりにある小さな骨のくぼみや、ドレスの腰の曲線に沿って光をちらつかせただけだった。それだけだった。それだけで僕らは動けなくなった。

彼女は腰の辺りで小さく手を振る。

それから、ようやく——ステージの中央に向かって歩き始める。僕らがここで待ち続けていることは、彼女の心配の種にはならない。多くの熱っぽい視線も急かしも、彼女には気にならない。僕らだっ

たらつい考えてしまう、嫌われるという恐れも、彼女は抱かない。ゆったりとした、酔ったような歩き方をする。足音が鳴る。しとしと濡れる、湿っぽい足音。彼女がかかとを床につき、つまさきを離すたびに僕は柔らかな彼女の性器について考えた。つるつるとした、陶器のように美しい滑らかな性器を。肉付きの良い女ではなかった。胸や尻に男を魅了するような脂肪がついているわけではなかった。ただ、向こうが透けるほど薄く白い耳と、そこから胸元まで続く乱れのない一本の美しい線があった。皺の一つもない長い首筋と、ひんやりと冷たい広い胸元があった。僕らはみな彼女を見ていた。彼女は誰もみていなかった。僕らを誰一人も。彼女にとっては僕らはみな同じで、僕らにとって彼女は、たった一人だけの存在だった。その日、彼女は長いむかし話をした。それは夢の出来事のような不思議な話だった。彼女は子供のころの生意気な彼女について話し、意地悪だった友人について、それから街にあるいくつかの坂について話した。彼女は思い出すために話しているみたいだった。僕らは必要だったのかさえわからない。やがて話しが終わると、彼女は話しにオチをつけるみたいにな、たった一曲だけ歌った。その日、彼女が歌ったのはその一曲だけだった。

これが彼女だ。C o u L e N a eだ。

Cou Le Na e 2

僕は工場にいる。

ラッパ音、サイレンに似た音、それから誰かが作ったそれらしいメロディが流れている。始めのうち、この恐ろしい大音量に僕は心臓が放り出されたような気分がしたけど、今では鳴っていることをほとんど意識さえしなかった。あちこちで人の足音が聴こえる。

工場の廊下は薄暗かった。それから寒かった。ひんやりと冷気が、煙るみたいに染み渡っていた。電気はほとんどどこにもついていない。突き当たりの磨りガラスの向こうで、わずかに冬の日差しが見えているだけで。僕らは明かりを求めちゃいけなかった。ここでは節約が正しくて、明かりは敵だった。事務室にも、トイレにも、廊下にも明かりはない。夜でさえ普通よりも暗く調節された明かりが灯るだけだった。急に音楽が止み、誰かの名前を呼ぶ声がスピーカーから聴こえた。僕の知らない人だ。ここは知らない人だらけだし、しばらくすると、また音楽が鳴り始めた。

「考えてきたか」

すでにトイレの中にいて、用を足しながら黄色い帯を眼で追いかけていたケイスケが言った。

「なにを」と僕。

「なにを、なにを——か」

「僕は知らない。なにも知らない」

「そうやってわからないフリをすればいいさ」

「フリじゃない。わからないんだ、事実として」

「事実として、か」

彼は僕の言葉を信じずに、眉を上げる。

「事実をねつ造したいってわけだ」

「お前が捕まったときにも、俺は警察に同じことを答えるよ。なにも知りませんよ僕は、本当です、なにも知らないんですよ——」

「事実として、ね」

ふざけたような言い方で彼は言う。

「じゃあ俺の計画には乗らないって言うんだな。大金を手に入れた後で後悔するなよ」

それから彼は、作り上げた犯罪の計画について話し始める。よどみなく彼は語る。言葉につまったり、なにかが思い出せなくて考え込んだりしない。すっかり細部まで作り込まれた計画を、始めから終わりまで話してしまう。彼はいつでも犯罪の計画を立てていた。僕はいつでも彼の話を聞いた。彼は主婦が宝くじが当たった後を空想するみたいに、自分の犯罪計画について語り、語るだけで満足感を得た。計画は決して実行しない。ラインの内側で、向こう側を空想するお遊びだ。僕はトイレの壁を見ていた。彼もまたやはり見ていた。これは二人で共有する儀式的なお遊びだ。彼は計画を話し、僕は排尿する。煙を立てる。

「それでいいのか」計画を話し終わると、彼が言った。

「それでっていうのは？」

「そのままで良いのかっていう意味だ」

「そのままでっていうのは？」

「人生がこのまま惰性で進んで行くのを、ただ見守るのかっていう意味だ」

「ほかにどうしようもないじゃないか」

「ジャンプするんだよ、遠いどこか、別のところへ」

すっかり尿を出し終えた彼は、僕には見えない位置で性器をぶんぶん振り回すと、ぴちゃぴちゃ音を立てた。ジッパーをあげる音が

聞こえ、彼の臓器からわき上がるうめき声がする。銀色の丸いボタンを彼が押すと、遠く海の向こうから水がやってきて、彼の黄色い形跡を流して行く。僕は身震いする。トイレの水が流れるこの音を聞くと、僕は足下に地獄が広がっていることを考えなくちゃならなくなった。地獄にもこんな滑らかな陶器があつて、みんなが用を足しているんだろうか。

「ジャンプしなかったらー」

彼は言った。その日の彼はいつもと違った。ただの空想を話しているのとは違う、なにか、決断した跡のようなものが見えた。唇が震えていたのは寒さのせいだけではなかったのかも知れない。

「ジャンプしなかったらー永久にそのままだ」

彼はいろんなことに不満があるみたいだった。今の生活に対して、それからこの工場での勤務について。彼が信じる自分の位置はどこか素晴らしい上流階級だった。現実はこちらだった。勤務中にときどきズルをしてトイレに行くのさえ喜びに感じる、狭苦しい規律の中だった。彼がどうして、自分をそんなに過大評価しているのかはわからなかった。いつも隣にいる僕がその感覚を考えるには、彼にはどうやら強い確信があるみたいだった。事実や客観的な条件なんかじゃない。ただ確信がある。彼が信じていたのはそれだけだった。身体の中に指を入れて、手探りで真実に触れたみたい、彼は自分の抱くその確信を強く信じていた。確かに俺はここにいる、何か高い目標があるわけでもない、なにかに恵まれているわけでもない、これまでの人生で誰かを遠く引き離すような素晴らしい結果を残したことがあるわけでもない。けれど俺は確信している。俺はこんなところにいるべき人間じゃない。――彼はそう思っているらしかった。

彼は順応力とでもいうべき、僕の樂觀性についてもいらだっていた。僕がここでの生活にすっかり慣れて、とっくに自分を変革させることを諦めていたからだだった。彼が言うには、僕もこんなところにいるべき人間じゃないらしかった。こんなところにいるべきじゃ

ない人間が、じたばたもがきもせずに、奴隷のような今の生活に甘んじていることが彼には許せないらしかった。彼の中には不思議な階級意識があった。それを決定づける条件は彼にしかわからない。例えば、部署のまとめ役に僕が怒られたりなんかすると、彼にはそれがひどく気に食わないらしかった。なんだってあんな毛の薄いラシクの低いやつに――彼はこんなふうには、人を“低い”か“高い”で語るのだった――いいようにされて平気でいられるんだ。彼は僕に向かってそう言った。「アイツが同級生だったら、きっと俺たちには頭が上がりなかつたはずだ」これが彼の口癖だった。僕には彼の持つ確信や、人々を社会とは別の仕組みで再編成する能力が備わっていなかったから、ただその言葉の余波を感じるだけだった。そういう感じ方もあるのかも知れないな、僕はそう思うだけだった。そういう彼の思考とは無関係に、彼の身体はどうしようもなく工場に順応していった。工場の自虐的な節制と、一秒まで定められたスケジュールと、ランダムに演奏する工場のプレス音に。

「おい――頼む、そんな風に水をたくさん出さないでくれ！」

手を洗う僕に向かって彼は言った。すでに手を洗い終えて、わずかに開いた窓から外の空気を嗅いでいる。彼は自分でも気づかないうちに、必要以上という贅沢が許せなくなっていた。あちこちに張られた工場の張り紙のせいだった。

「出してないよ」

「出し過ぎなくらいだ！」

「手を洗えないよ」僕は笑う。

「少しでいいんだよ、少しで！頼むから――少しに！」彼は言った。「水が大量に出ているのを見ると、ハラハラするんだ！」

トイレからの帰り道、僕らは自分たちの部署に回り道をして帰って行く。一番近い道を選んだりしない。足がすっかり覚えてしまったから、僕らはどちらも無言で、なんのサインもなく並んで道を選択する。小さく泡立った緑色のボードを過ぎ、正門に射し込む陽の光を磨りガラス越しに見つめ、来客用の高い渡り廊下から、すでに

部署に戻り働き始めている灰色の彼らを見渡した。彼らは似たように不機嫌で、眠たそうに疲れていた。ひげを毎日剃るのは諦めていた。これが僕らだ。巨大な画面みたいなガラスの前で、僕らはいつも立ち尽くした。

「本当に乗らないんだな……俺の計画に？」

彼は言った。

「乗らない……」僕は一瞬、躊躇した。彼の言葉があまりに真剣だったからだ。「今よりも自分を下げたくないんだ」

「浩二の——浩二の話しは聞いた？」

「いや」

「昇進したよ」

「まさか！」

「本当だよ、信じられないけど本当だ」

ケイスケはズいぶんそのことについて考えてきたみたいだった。僕に話すまえに、さんざん悔しい想いをしてきたみたいだった。僕はテレビを見ながら、映像が頭に入らないケイスケを想像した。狭い部屋と、いつも誰か来客が来そうな雰囲気にはびくびくしているケイスケを。

「たった二年でだ」彼は言った。「俺はもう三年だ。なにか特別悪いことをしているわけじゃない。あいつが特別優れているわけじゃない。それどころかわざとらしい愛想がうまいだけで——。クソッ、俺たちは未だにセミ・スタンダードだっていうのに——」

「待ってくれ！」僕は慌てて言う。

「なんだよ？」

彼は顔をしかめて聞いた。

「なあ……」僕は一瞬、言おうか躊躇した。

彼はわからずに僕の言葉を待っている。

迷ったけれど、僕は言うことにする。

「なあ……僕はセミ・スタンダードじゃない。スタンダードだ」

「おい——」彼は笑いかけた。

「待ってくれ！」僕は急いで言う。「くだらないさ、くだらないよ、確かに。けど――」

「スタンダードもセミ・スタンダードも同じじゃないか。給料も、やっている仕事も、扱いも。こんなもの、会社が俺たちを少しでもおだてて、奴隷意識をごまかそうとしているだけの建前じゃないか」彼は笑いながら言った。

「知ってるさ、そんなことはもちろん――」

「勘弁してくれよ……」

彼はおかしそうにそう言う。

「そうだとしても」僕は少し苛立って言う。「そうだとすると、せめてスタンダードになってから言ってくれ」

彼は笑うのをやめて、しばらく僕を眺めた。僕も彼を見ている。僕は苛立っていた。けれど、彼は怒っているようには見えなかった。彼は悲しそうに見えた。もしかしたら、あれは憐れみだったのかも知れない。まるで遠い夜に浮かぶ火事を見つめているような、そんな顔だった。僕を哀れんでいるとは思いたくなかった。せめて苛立って欲しかった。彼の瞳は、左右に揺れていた。

「確かにくだらないけど」僕は言った。「ここじゃ数少ない楽しみの一つなんだ。お前の言うように、僕らは知っている。この階級が、工場が用意した子供騙しのエサだってことも、実質上なんの意味もないことも。けど、実際に、僕らはそれを楽しみにしているんだ。プライドを慰めてくれて、惨めさを忘れさせてくれる数少ない――」

「お前がもし本当に、そんな風に自分の境遇がみじめだと思っているなら――」

彼は僕の言葉を遮ってそう言った。それから浩二に対する長い悪口を。彼は僕らを出し抜いて昇進していった浩二が気に食わないらしかった。たしかに、浩二には僕らをいらつかせるなにかがあった。それは突き詰めて言うなら、わざとらしさだったのだと思う。浩二はなにをするにもわざとらしかった。彼が上司におべっかを使うの

も、一生懸命働くのも、疲れた表情を浮かべるのも、全部がわざとらしく見えた。けれど、そう思っているのは僕とケイスケだけじゃなかった。あらゆるこの従業員は、彼のそうしたわざとらしい行為を、額面通りに受け取るのだった。彼は真面目で正しい人間だよ、人がそう言うのと僕は黙るしかなかった。

「――ジャンプするんだよ、遠くに、今いるここではないどこか遠くに」

彼はそう言ったんだった。僕に決断を迫るように、わずかに怯えた調子で。

夜が来た。外の喫煙所は寒い。僕は地震に怯える鶏みたいに首を振って震えながら、しょっちゅう両足のかかとを突き合わせなくちゃならなかった。風が吹くたびに、冷たさが服に手を入れてきた。喫煙所というのは名ばかりで、もうずっと洗ってない古びたバケツがひとつ置いてあるだけだった。中に張られた尖った氷は、ニコチンに茶色く染められていた。バケツは吸殻を一本ほうられるたびに、自分の身体が黄色かったことを忘れていくらしかった。いまでは凍ったニコチンの茶色とそれほど変わらない色をしている。薄く、かき氷にかけるキャラメルみたいな茶色。

ここはとつくに真っ暗だ。工場の建物は暗闇の中だとあまりにも大きくて、誰か遠くを見ている人の背中みたいだった。もう人が帰り始めていた。多くの人が玄関の前で靴のかかちに指を入れていた。建物のところどころにはオレンジ色っぽい明かりが灯っていて、それが地面に四角く反射して、きれいに並んでいた。反射した光の中に人が入るたびに、暗闇の中で影だった人々が一瞬浮かびあがる。彼らは過去の記憶だ。僕がすれ違った名もない通行人だ。明かりの中で一瞬、色付けされるたびに彼らはそれぞれの独特な顔を見せた。汗ばんだ黒い顔、尖った鼻、消えない隈をつけた目、潰れた前髪、小銭を握りしめた油の染みた手。彼らは反射した明かりの外に出ると、色を失い、再び暗闇の凹凸に戻っていった。彼らの頭上に、すでに畳まれた企業の旗が垂れていた。遠くでエンジンをつけっぱなしにした、白みを失った軽トラックがあった。いつまでもウィンカーが暗闇に浮かんでいた。

みんな、どこに帰るんだろうー僕は思った。彼らがみんな、僕らと同じように生活しているというのが信じられなかった。

それどころか僕は、工場の近所を流れている国道の向こうさえ想像できなかった。片側二車線のその国道には、いつも銀色のトラックが流れていて、僕らはそこを鉄の川と呼んだ。トラックは生きの良い魚だった。排気ガスは水だった。あまりにも多く流れるトラックと、空気中に膨らもうとする粉っぽい排気ガスに追い立てられて、僕らは国道を越えることが出来なかった。ときどき、足をくすぐる冒険心が湧いてこのあたりを散策するたびに、僕とケイスケはその道の前で呆然とさせられた。立ちすくむ僕らの前で、次々とやってくる輝く銀色のトラックは地面を震わせ、黄色い砂埃を巻き上げ、国道の向こうの景色を蜃気楼みたいにぼやかせた。列はいつこうに途切れなかった。僕らはただ見ているだけだった。狭苦しい更衣室に入るたびに、僕とケイスケはあの道の向こうを空想した。はじめ、僕らにとってあの道の向こうは空白だった。建物も地面も、砂も道路もない。ただどこまでも広がる白い地面。やがて僕らはそこに人を住ませ、戦争を起こさせた。最新の兵器やレーザーの飛びかう近未来の戦争。その戦争は少しずつ深刻化して、今では僕らの将来を決定する最も重要な要因となっていた。人は狭いところにいると、かえって空想を広げるのかも知れない。

僕はときどき、ひどく驚かされた。自分が想像しているよりも、はるかに自分が歳を取っていたからだ。僕はいつの間にか20代も半ばまで来ていて、あつという間に30代になりそうだった。そんなはずはないのにー僕はそう感じた。ここでは体感する時の速度よりも、実際に身に降りかかる速度の方がずっと多かった。それは工場での綿密に仕組まれた同じリズムのせいだと僕は思った。ここでは外の世界よりも速く時が進むんだ、僕はそう考えた。そう

いう想いを、みんなが集まったときなんか口にしてみることがあった。すると、とつくに悟った先輩の従業員がこんな風に返してきた。

「時間が速いんじゃない。自分であることを忘れるんだ」

これは一種の信奉だった。この説の真偽も、出所も、科学的な根拠もなにもわからなかったけれど、この工場で働く誰もがこの説を信じていた。”僕は速い時の中を生きているんじゃない、いつも自分であることを忘れて生きているんだ”。そのせいで僕は、ときどき、朝目が覚めるときに、あまりにも歳を取った自分に気づいて、ドキドキしながら冷や汗をかかなくちゃならなかった。どれだけ窓の向こうの灰色の朝を眺めても、自分を忘れていた期間は戻ってきそうもなかった。あるとき――この説に対して、ケイスケが僕にこう言ったのを僕は覚えている。

「けど、この工場に、俺たちに自分であることを忘れさせるなにあるんだろう？」

「そこにはこう書いてあるんだよ」

僕が休憩室に戻ると、脱ぎかけた作業着を肩にかけたままケイスケがそう言った。

「警告、警告、決して許せないマナー違反に対して警告。いったい、誰がここにこんなものを詰めたのか。警告する。火曜日に捨て

て良いのは、燃えるゴミと生ゴミだけ。ほかのものは一切、絶対に、どんなことがあると、捨ててはならない。これは警告。そのルールが守れない者は、ここにゴミを置いて行ってはならない。このゴミの持ち主はすぐに持ち帰るように、バカが。ーバカがってところは、ほかのところよりも大きく書かれていて、ものすごく憎しみがこもってるんだ」

「なんのはなし？」パイプイスを僕は引っ張り出す。

「現代で最も難解で、かつ身近な問題の一つについて」

「というと？」

「ゴミ捨てに関するはなし」

「燃えるゴミの日に置いた自分のゴミを、回収してくれなかったらしい」

「代わりにその地区の管理者が痛烈な警告を貼っていったんだ」

「捨てようとしたものは？」

「たいしたものじゃないよ」

「というと？」

「漬物石」

「無理ですよ」浩二が笑った。「それは持っていつてくれないでしょう。なにしろ燃えませんか」

浩二は帰りかけの姿勢でいる。もうずっとその姿勢でいる。僕がタバコを吸いに外に出ていく前からこの姿勢だった。彼はこの部屋で唯一、きちんと着替えを済ませ、髪も綺麗に水でとかし、文句一つない姿でそこに立っている。身体は出口を向き、誰か知らない人が見たら、彼が帰りかけに呼び止められたんだと思うだろう。実際は誰も呼び止めたりしなかったし、彼は帰りかけでもなかった。彼は帰らない。僕とケイスケはそのことを知っている。その姿勢のまま、浩二は何時間だって話し込むだろう。ケイスケにはそのことが気に入らないらしく、僕しか気づかないレベルで浩二を苛めている。

「そんなことは馬鹿でもわかる」

ケイスケはだらしなくイスに深く腰掛けている。

「そんなことは、馬鹿でもわかるんだよ、バカ。それとも、わからないと思ったのか？」

浩二が何か言い出そうと口を開くと、ケイスケはそれを遮って言った、身を起こしながら。

「漬物石が燃えないってことはー、そりゃあすぐわかる。誰にだってわかることだ。どんな人間にも、漬物石が燃えている姿を想像することは出来ない。猿にも出来ない。俺がいきなり燃えるゴミの日に漬物石を置いていったと思うのか？違う違うーそうじゃない。それに、よく考えてみれば良い。漬物石というのは、いつの日に捨てるのが正しいんだろう？燃えないゴミの日か、資源ごみの日、それとも粗大ゴミ、どれだろう？お前の台所に貼ってあるゴミの日カレンダーを眺めてみれば良い。裏までじっくりとね。恐らく、どこにも書きじゃないだろう。漬物石を捨てる日なんてのはね」

部屋には僕らしいかない。後は大量生産されたプラスチックみたいな木のテーブルと、真ん中に穴の開いた白いイス、それからいつも取り合いになる緑色をしたパイプイスー今日はみんなの気づかないところに一脚残っていたので幸運だったーあとは、淀んだ空気だけ。僕のと年には新人のスグルがいた。彼はかすかにまだ緊張していて、なにも話さない。僕の向かいに村田さんがいて、ヘルニア用のバンドを慎重に剥がしている。まるで地肌を剥がしていくみたいに、苦痛に満ちている。彼は背筋を伸ばす。息をつく。額に汗をかき、再び剥がし始める。

「それは……どんなふうな、えー、見た目なんだね？」

「そこなんですよ、村田さん」

「重要に思われるねえ……」

「よくあるでしょう、プラスチックで作られたような漬物石というものが」

「把手がついていて、つるつるした表面の……」

「ああいうんじゃないですよ、ああいうんじゃ全然！」

「ということはつまり……」

「そう、まるっきり石ですよ！」

窓の暗闇の向こうで、ずっと遠くで、小さな車が過ぎていくのが見えた。明かりが小さく建物と建物の間を過ぎていく。ケイスケは

興奮して叫ぶと、宙に手を振って石を再現しようとした。彼は背筋を伸ばす。手を振る。テーブルの上にざらついた大きな石が現れ、僕はそれを見た気分になる。彼は再び椅子に深くもたれる。

「燃えないゴミの日に出すべきだった。もしくは、別の日に」

必要以上に大きな声で浩二が言った。

「馬鹿だなあ」一瞬、驚いてケイスケが言う。「お前は」

「どうしてです？」

「さっきも言っただろ。すでにそんなことはやってんだよ」

「結果は？」

「そんなことはもちろん試してるさ」

「どうなったんです？」

「あー、誰か」村田さんが立ち上がった。それから茶色く粘ついた眼でみんなを眺める。彼の眼はいつも古い黄金の蜜みたいな色をしていて、その眼で情けなく人の機嫌をうかがってばかりいた。僕は彼の視線に判を押されていく。ゆっくりとした立ち上がりだった。時計の秒針が一周するよりも遅い、月の移動のような緩やかな変化。

「あー、誰か……。コーヒーを飲みたい人はいるかね……」

誰も返事をしなかった。スグルがわずかにお辞儀したのを僕は感

じた。

「あー……、自分で入れるか……。来週、腰の手術なんだがな……」

奥の狭いキッチンに姿を消しながら、彼は振り返ってそう付け足した。

スグルは、僕の隣に座って、かすかに微笑みながらみんなの話を聞いている。そうするのが新人の義務だと思い込んでいるみたいだった。彼が新人研修をうけている姿を何度か見たことがある。中年太りした毛の薄い上司に怒鳴られている姿を見たこともある。彼は今と変わらない微かな笑みを浮かべて、上司の説教を聞いていた。その姿はまるで、自分とは関係の無い出来事に関する上司の小言を、優しさで聞いてあげているみたいだった。ほとんど話さない人間だった。怒ることがあるようにも見えなかった。白い肌と、少年みたいな顔をしたおとなしい人間だった。

「どうなったんです？」まだ浩二が聞いている。辛抱強く笑顔を保っている。

「そんなことはとっくにー」

「どうなったんだよ？」僕はみかねて、笑ってそう言った。

「驚くなよ」嬉しそうにケイスケは僕の方に向かって身を屈めた。

「どうだろう」

「それがな」

「うん」

「誰も気づかなかったんだ！」

ケイスケはテーブルを叩いて叫んだ。

「誰もだよ！俺が置いていった漬物石は、俺に置かれたその日からずっと、誰にも気付かれずにそこに置いておかれたんだ！いつからいつまでだと思う？一週間だよ！おかげで、俺の漬物石はすっかり苔が生えちゃった。何度、回収車がやってきたと思う。それから何人がそこを過ぎたと思う。誰も気づかなかったんだ、誰も！漬物石はそこに、”そのへんに落ちてる石”だと思われたまま、一週間もそこでじっとしてたんだ！」

窓には半分ブラインドが降りている。埃をたっぷり背負った、元は白のブラインドが。ケイスケは喉の奥から狂ったような笑い声を立てた。何度もテーブルを叩き、それから何かを叫ぼうとして窓を開いた。すると外の冷気が一瞬間に吹きかかり、彼に昔行った海の街を思い出させる。我に返った彼は、腹をさすりながら、笑えるよ……と呟いた。笑えるよ、ホントに……。出てもいない涙を彼は拭いた。

「それ、面白いですね」

採点するみたいに浩二がそう言ったから、僕らは笑うのをやめた。

「気に入りましたよ」

ここではどうしてなにもかもが灰色なんだろう、と僕は思う。ブ

ラインドも、僕らの着ている服も、人々の眼も、将来も、なにもかもが。僕は窓の外で離れた棟の一室に明かりが灯るのを見つめ、それから誰かが廊下を足音で満たすのを聞いた。何かが転がる音がとなりの部屋で響いた。時計はかかっていたけれど、時間が合っている保証はなかった。

「なあ」

奥から出てきた村田さんが情けなく尋ねた。

「なあ付け方はわかったんだ。止め方がわからないんだよ。今気づいたんだ、沸騰したらどうするんだって……」

「なにがです？」

「コンロだよ、コンロ、火の付け方はわかったんだ、ホントだよ……」

僕はまだ部屋にいた。みんなぐずぐずと居残っていた。長い会話の跡があった。会話は少しずつ興奮を帯びてきて、今では最高潮を迎えようとしていた。小道に入ったり、開けた丘に出たり、再び小石の散らばった山道を登るみたいに、僕は少しずつどこかへ向かって行った。村田さんは家庭での自分の居場所について嘆き、僕は流行りのドラマについてひどい批評をした。浩二は誰にも理解できないセンスで、冗談としか思えないデザインの車を買おうとしているらしかった。その喜びを分かち合えると信じて彼は計画を話した。会話は少しずつでは前に進み、新しい歯車を組み込むと、ずれ込むように前に進んだ。

「簡単ことなんだ」

ケイスケは投げ出した右手で、テーブルの上に張り付いたセロハンテープをこすりながら言った。

「たった一步のことなんだよ」

僕はケイスケを見ていた。いつの間にか、誰もがみんな。

彼はもうしばらく、熱のこもった演説をしていた。僕は彼の話に耳を傾け、質問し、再び耳を貸した。夜はずいぶん落ち着いたけど、僕は帰るそぶりも見せない。浩二はいつの間にか壁にもたれていた。ケイスケの話は僕らには、なにか自分の人生を決定付ける

重要な話に思えた。ケイスケが僕らの目の前で、僕らの人生を暴いていくように感じられた。静かだった。誰もが顎に手を添えて、ときどき乾いた指で唇を撫でた。

「人の居場所を決めるのは、そう……たった一步なんだよ。多くの現象や多くの要因があると言っても、結局は、その一步なんだ……誰も認めようとしなくて……。誰もが一步を怖がるんだ。自分のエリアがあって、空間があり、世界がある。そのラインを越えようとするとき、人は凄く臆病になる、自分でも気づかないうちに……。その一步が重要なんだ……。結局はその一步がすべてなんだよ……」

誰もほとんど身じろぎもしなかった。これは無意識に行われる共犯だった。僕らはこの空間や、雰囲気崩さないために、少しも動かない方が良いことを感じている。浩二でさえ理解している。少しだけ開いている窓から、外の風の音が聞こえる。誰かが外で話をしている。建物に声が反射する。パタパタと回る換気扇の音。冷蔵庫の唸り。どこかで稼働する機械音。僕らはケイスケの言葉を聞いために集まったかのようにだ。

「いくつも見てきた。いくつもの人々を……。その中には、成功していると言われる連中もいれば、失敗と言われる連中……。例えば俺たち――」

そう言いかけてケイスケは、”俺たち”を”俺”に訂正する。

「例えば――俺みたいな落伍者もいる。成功していると言われる人間と、俺みたいな人間になにか違いがあるわけじゃない。才能や環境や、センスや、考え方に。人間はみんなが思っているよりもずっと、それほど変わらないんだ。こう言うと、傲慢に思われるかも

知れないが……一流企業で働くビジネスマンも俺も、それほど大した違いがあるわけじゃない……。違いがあとすれば、たった一つ、勇気なんだよ。無謀さと言い換えてもいい……。彼らはみんな、誰もが怖気づく一步で、躊躇しないんだ。いやー躊躇はするかも知れない。けど、結局は越えていく。その一步なんだよ、重要なのはその一步なんだ……。その一步が、俺たちを束縛し、居場所を決定付けるんだ……」

彼は説得するみたいに語った。

やがて、彼の話は自分の立てた犯罪計画にずれ込んでいった。けど、それがわかったのは僕だけだった。相変わらず会話は抽象的で普遍的なことについて話しているかのように見えた。僕以外の誰もが真剣な表情で耳を貸した。彼は言った。「もしも自分の今の現状を変えたいなら、何か無茶に思われる一步を踏まなくちゃならない。これまでの自分と同じように生きるのは、遠まわしに自分の将来を容認することと同じだ」。僕らはすでに、自分の将来を覚悟していた。どう考えても、これ以上うまくいきそうにない自分の環境と、せいぜい結婚して子供を生むぐらいしか変化を持てそうにないことを。ケイスケは未来に落胆していた。自ら前進する椅子に縛り付けられてるみたいだと言った。木製の古びた運命の椅子が僕らを運んでいく。僕らは前方を見ながら憂鬱を膨らませていく。なにか無茶をしなくちゃ、無茶をしなくちゃ変わらないんだ……。彼は震える唇でそう言った。

「だからと言って、犯罪をして良いことにはならない」僕が言った。

「しても良いとは言っていない」

「そんな風に聞こえるけど」

「誤解だよ」

「無茶をすることと犯罪をイコールに考えるのは間違ってる」

「それじゃあ教えてくれ」

「なにを」

「ほかにどんな手段があるか」

僕は何も答えない代わりに手を宙に上げる。

「それを実行するから教えてくれよ」

「例えば……」

何も語らずに僕は上げた手を降ろす。

「金も、才能も、知識も、知識を蓄えるだけの時間もない。そんな俺が出来るなにかがあるんだったらー教えてくれよ」

工場内のチャイムが鳴って、どこかで扉の開く音が聞こえる。次第に聞こえる足音が大きくなり、とうとう僕らのところまでたどり着くだろう。チャイムはあまりにも大きな音で鳴るから、僕らは話すことも出来ない。その間に、それぞれが飲んだコーヒーのカップを片付け、僕は奥にある小さなキッチンに向かい、マグカップの底に溜まったコーヒーの残りを洗い流した。チャイムはたっぷり三分も鳴ると、僕らの耳の奥に不快な響きを残して消えて行った。部屋

ではみんなが立ち上がり、イスを片付けたり、上着を着たりしていた。すっかり遅くなったから、ケイスケも僕も着替えることを諦めていた。作業着の上から防寒具に袖を通した。

「簡単だよ」

廊下に繋がる扉に向かいながら、ケイスケが言った。背後で村田さんが忘れ物のチェックのために指を振っていた。

「簡単だよ、たった一言で良い。『俺に手伝わせてくれ』その一言で、お前は現状を変えられるんだ」

「いったい、なんの話をしているんだ……？」不安そうに村田さんが僕に耳打ちした。

下駄箱は暗くて、湿気った汗の臭いがした。すっかり暗くなった玄関口で、僕らはそこよりは少し明るい外の光を頼りに、自分の靴を探す。工場用の靴を下駄箱にしまうと、砂のザラザラした感触があった。ずっと開けっ放しの玄関の広い扉の向こうで、夜は明るかった。ほとんど何もかもが見えた。門まで続くうねるような道も、花壇も、見栄えのために置かれた岩の表面も。もう外には誰もいない気がした。遠くで、国道を走るトラックの地響きが聞こえなかったら、僕らは自分の吐く白い息すら信じられなかったかも知れない。建物の向こうで、警備員が一人で巡回していた。

みんなと別れると、僕とケイスケは二人で並んで、黙ってバス停までの道を歩いた。バス停に向かう道は暗くて、お互い話すことは何もなかった。その方が心地よかった。僕らは世界に二人しかいない気分だった。

「か、変えたいんだ、今いる自分の場所を、自分の世界を」

だから後ろからスグルがそう話しかけたとき、僕らはお互いに、相手が自分に向かって話かけたんだと思った。

「僕に手伝わせてくれ。か、変えたいんだ、自分の世界を」

僕らが振り返ると、スグルは怯えた目で、なにかにしがみつくだいにそう言った。

C o u L e N a e 5

僕は彼女について考えている。C o u L e N a eについて。彼女はいつでも僕の思考の中で完璧だったから、ほかのあらゆることを超越して僕に誘いかけた。

彼女は笑っている。いつでも笑っている。

髪の毛が揺れて、僕は彼女の性器を考える。太ももを考え、陶器みたいに滑らかな足を考え、親指と中指について考える。マニキュアの剥がれかけた親指の爪について考える。彼女が振り返った後に見せる、腰のくぼみについて考える。彼女の首筋を考え、関節の皺について考える。

僕は彼女のすべてを思い出せた。

降りかけの雨が停滞した土曜日の長い夜に、僕は再び彼女に会った。彼女はそこにいた。いつものあの場所に。ほかにどこにいるというんだろう。僕には想像もつかない。

彼女はステージにいた。僕は下から見上げていた。珍しく彼女は歌を歌い、僕らは珍しく彼女の歌を聴いた。集まった僕らは彼女の

前で、誰でもない誰かになった。彼女にとって、僕らが個人であるうが、誰か知らない人であろうが、樹木であろうが、煙であろうが同じだった。僕らは前方から眩しい光を感じ、揺れながら薄まってゆく煙になることを選んだ。彼女を見に来る人は少しずつ増えていく気がした。ここに来る人は、格好も顔も、性格も職業も人生も全然違ったけど、来てしまえば同じだった。僕らはただ見上げている。彼女は僕らの誰一人も特別視しない。心地よい匿名性の中で、僕は煙になり揺れている。彼女に憧れの視線を投げ続ける。僕らは何もせず、彼女は行動する。彼女が歌い、僕らはそれを見守る。僕らの理想として彼女が存在するみたいだった。

そんな日の最後に、彼女はピアスを落とした。

一片のキラキラ光る、小さなピ阿斯。僕がそのピ阿斯に腕を伸ばしたとき、ほかに三人の男が同じように手を伸ばした。けれど、ピアスを手に入れたのは僕だった。さっきまで彼女の柔らかな耳たぶについていたピ阿斯だ。彼女の身体の一部だったピ阿斯だ。僕はそのピアスを手に入れたことで、彼女と急に親密になった気がした。僕は彼女と口を聞いても良い権利を得たようにさえ思った。僕は彼女の落としたピ阿斯を持っていて、ここにいるほかの男たちは持っていない。僕は彼女の友人になった気がした。

「僕が手に入れたんだ」

物欲しそうに腕を伸ばしたままの三人に、僕は興奮して言った。

「僕のピ阿斯だ」

彼女は振り向きもしなかった。音もなくステージから去っていった。

彼女がつけていたピアスを手に入れたんだ。僕はこれまで抱いたことのない、家族のように親密な気持ちで、彼女の背中を見送った。揺れる長い後ろ髪は、僕には手を振る合図に見えた。

冬は深まっていった。そして工場の廊下はどんどん薄暗くなって

いった。タバコを吸い終えた僕が休憩室に戻ると、薄暗い部屋の中に、ケイスケとスグルがいた。二人はあれ以来、急に仲良くなったみたいだった。部屋の中は暖房がついていなくて、すごく寒かった。ほかに誰もいなくて、どこにだって座れたのに、二人はパイプイスを並べて、身を寄せるみたいにして隣り合って座っていた。

僕は彼らの背中を見た。

笑いながら震える背中を。僕の知らない話題について親密に語る、二人の背中を。

僕は声をかけることがうまくできなくて、そのまま二人を過ぎて、奥の台所に入ってしまった。彼らを過ぎる瞬間に、ケイスケが僕に気づいたのがわかった。けれど、僕は立ち止まらずに、奥までやってきた。

「本当に、やらないのか」追いかけてきたケイスケが後ろからそう言った。

「ん？」

たった今、ケイスケの存在に気づいたみたいに僕は言った。ケイスケの方を向かずに。僕は棚からコップを取り出して、水を汲んだ。

「本当にやらないのか？」

「なにを」

「なにをってお前」ケイスケは笑った。

「ああ」僕は水を飲んだ。それから意味もなくシンクに水を捨て、それからまたコップに水を溜めた。

「スグルはすぐく乗り気なんだ」

「そうなんだ」僕は笑った。

「あいつはああ見えて、すごくよく考えているやつなんだ」
「ふうん」

「俺たちと同じだよ」

「なにが？」

「人間が」彼は言った。「人種が」

ここにいるべき人間じゃないというところが。彼はそう言った。

僕はコップに溜めた水をごくごく飲んで、それからケイスケの顔を見つめた。嬉しそうな、満ち足りた表情をしていた。ケイスケは僕の言葉を待っていたけれど、僕はなんにも言わなかった。ただ、僕らが思っているほど、今二人のいる場所は近くないのだと僕は感じた。ケイスケは今や僕の分身ではなかった。かつてはそうだったのに。曇り空に向けて気球船が飛んでいくのを眺めている気がした。

翌日、勤務を交代する忙しい移動の時間になると、僕はその日同じシフトだった浩二と村田さんと一緒に移動する集団の中にいた。僕らは目の前の同じ色をした靴に合わせて、急いで歩き、廊下から廊下、階段から階段へと移動した。二階の渡り廊下は電球が切れていて、じいじいと音を立てながら、壁のポスターを照らしたり隠したりした。浩二は僕の隣で額に汗を浮かべながら歩き、深刻そうな顔で忘れ物をしたと僕に耳打ちした。

「すぐ戻るから！」彼は人波を割って進み、やがて見えなくなっ

た。浩二が生み出した人波の亀裂が、なんにもなかったみたいに戻っていくのを眺めていると、遠い廊下の突き当りで、二つの人影がふざけあっているのに気づいた。すぐく遠かったけど、それはケイスケとスグルだった。目の前をいくつかの顔が過ぎた。二人の背後で、トイレのドアがゆっくり閉まった。僕とケイスケがいつも集まっていたトイレだ。僕らがいつもそうしたように、彼らは時間を示し合わせて、勤務中に抜けだして来たらしかった。今はスグルがケイスケの話聞いていた。彼の興奮した演説を、いつも言いたいことをうまく言えずに、ジェスチャーで表そうとするその手が語ることを、耳元で囁くように語る、彼の笑い話を。彼らは親友みたいだった。笑いながら肩を突き合って歩いていた。あまりにも二人は仲が良さそうに見えたから、僕はもしそうできたとしても、彼らに駆け寄りたりしなかったと思う。そうしたとして、最初にかけるべき言葉が思い付けなかった。

そして、誰かが僕の背中を押した。

ケイスケもスグルも、僕には気づかずに、僕の視界から消えた。人波に押されながら、僕が無理やり前に進んでいくと、後ろで彼らの笑い声が廊下に響いた気がした。けれど、笑い声も僕も、すぐに薄暗い階下へ消えた。ここではなにもかもが、冬の暗闇に消えていくみたいだ。

夜が来て、二人きりで帰り道を歩いているとケイスケが言った。

「なあ、本当にやらないのか」

「うん」

「どうしたんだよ？」

「どうしたって？なにが？」

彼は何も言わなかった。けれど、僕には彼が言いたいことはわかった。そして、彼には僕がわかったことがわかっていた。

「なあ……」彼は心配するように、本当のことを言って欲しそうにそう言った。

「本当にやるの？」僕が聞いた。

「本当に、やるよ」

「本当に？」

「本当に」

僕はケイスケの顔を見た。彼はやろうとしていることを考えると、緊張するみたいだった。まばたきの回数が急に多くなった。僕はもう止めることは出来ないのだろうと思った。それに、始めのうちケイスケを心配して止めていた僕は、今では別の理由で彼らに止めさせようとしていた。そのことは自分でもわかっていた。僕の中の、ケイスケの計画に対する反発心は、ケイスケとスグルの二人が仲良くなればなるほど強まっていった。これは嫉妬だと思う。

「本当にやらないのか？」僕らの横をゆっくり走る大型トラックが砂を踏む音を立てながら過ぎていった。

「やるわけないだろ」必要以上に笑って、僕はそう言った。「犯罪だよ？」

彼らは本当に実行するのだろうか。そう考えると僕はドキッとし

た。これは彼らが一線を越えようとすることに對する恐怖だろうか。それとも、僕が置いていかれそうになることに對する不安だろうか。どちらにしても、僕にはもう参加するという選択肢はなかった。ケイスケとスグルの関係が深まれば深まるほど、僕は参加を拒むだろう。今では、僕は彼らの計画を嘲笑すること、最後の抵抗をしている。

「もし」僕が言った。「失敗したらどうする」

「失敗って？」

「警察に捕まったらどうする？」

「どうするって？」

「刑務所に入れられたらどうする？」

「懺悔して、決められた日数をそこで過ごして、それで、出てくる」

「その後は？」

「その後？」彼はニヤニヤ笑ってそう言った。「工場でも働くさ！」

変わらないじゃないか、どうせ！すでに底辺に生きてるのに、これ以上どうなるって言うんだ、捕まって、時が過ぎて、結局同じところに戻ってくる、俺たちがすでに底辺に生きてるって、忘れたのか？彼はそう叫んだ。

狂ったような笑い声を立てながら、彼は埃臭いバスの中に乗り込んでいった。赤い座席シート、脂っぽい手すり、うとうとした老人。バスは左右に大きく揺れながら、暗闇をかきわけて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733z/>

Cou Le Nae

2012年1月13日20時54分発行